

◇ この春、外交官となった卒業生からメッセージをいただきました。

歴史は学問の世界にとどまらない

学問としての歴史

「歴史好き」という言葉がある。大河ドラマに、歴史上の人物や戦いに焦点を当てたテレビ番組や映画、一步進んで史跡巡りなど、今や歴史は趣味としての立派な地位を獲得している。僕もその一人であり、一番楽しかった授業は何といっても日本史であった。

僕は、鎌倉時代の朝幕関係や、戦間期の政軍関係、中世ヨーロッパの叙任権闘争など、時代や場所を問わず、二元的な支配・統治体制になぜだか興味をそそられる。とりわけ鎌倉時代の公武二元支配体制、東国から武士が全国的な支配体制を作り上げていくという構図が好きで、高校の時点ですでに大学で日本史を学ぶことは決定事項。

その気持ちは入学後も変わらず、日本史研究室に所属する。時代を問わず様々な講義を受けるとともに、自分で課題を見つけ発表するといった演習形式の授業にも参加した。大学の図書館には様々な種類の書籍がズラリと並んでおり、多くの本も読んだし、授業を通して古文書も多少読めるようになった。友達と日本史の話をするのは楽しいし、中世史を専門にして大学院に進むのも悪くないなと考えたり…。

歴史の勉強は楽しい。なかなか楽しい…。が、このまま進んだ先に何があるのか。日本史を学んで何になるのか。研究者？日本史の先生？どちらにせよ、その道に進む覚悟はなかなか持てない。それ以上に、人生を懸ける意義が自分の中ではどうしても見つからなかった。

外交官の道

そうした迷いを抱えていた中で、偶然にも外交官の職を知る。だが、この職は、人生を懸けるだけの仕事だと直感的に思った。

現在の日本を取り巻く国際環境が非常に厳しいことは、以前からひしひしと感じていた。日本は現在、中国や韓国、ロシア、北朝鮮など多くの周辺諸国との問題（尖閣諸島や竹島、北方領土の領有問題、台湾海峡問題、北朝鮮のミサイル、日米安保など）を抱えている。平和で安全な時代はもう終わりを迎えようとしている。日本人としてこれらの問題は他人事として捉えてはいけない。

そして、こうした問題と密接にかかわっているのが歴史である。北方領土や竹島の問題は歴史認識の問題であり、その結果としての領土の得失は、日本の国防と密接にかかわる安全保障上の問題である。このように、現在の外交・安全保障と歴史は不可分のものだと僕は考えている。もっとも、根強く残る歴史問題を完全に解決するのは限りなく不可能だろう。だが、誤った日本の歴史が世界に広まってしまうことは非常に恐ろしいことであるし、何としても防がなければならない。その点に関してはまだまだ我々に努力の余地が十分にあると信じている。ならば、そのためには、その歴史認識がなぜ誤っているのか、何が正しいのか知っておかなければならないし、自分の言葉で説明できなければならない。

外交関係が良くなったり悪くなったりする要因は様々だが、歴史認識の問題はその一つに挙げられる。それゆえ、歴史を学ぶ僕だからこそ、歴史と外交の繋がりの中で活躍できる場所があるのではないかと。研究者や教師としての道はどうにも意義が見いだせなかった僕にとって、外交官の職は、人生を懸ける価値があり、そして使命感を持って働くことのできる職だと思った。そして、この文章を書いている今、間もなく外務省専門職として社会人生活をス

ターゲットする。

外務省専門職を目指すことに決めた大学3年生の春に少しばかり時間を巻き戻す。その時期に、大学における僕自身の歴史の専攻分野も大きく変わった。それまで純粋な鎌倉期の朝幕関係への興味から選択していた中世史ではなく、近代史（特に戦間期）を選択した。この選択も、戦前日本を学ばなければならないという、ある意味では必要性・責務ゆえの決断であった。明治に始まる日本国家の発展とその後の転落の歴史には、今の日本、そしてこれからの日本の政治・外交に活かせる精神や教訓が数多く詰まっていると思う。

道具としての歴史

「歴史を学んで何になるのか？」

歴史学に対するこのような懐疑的な見方がある。文系学部の縮小・削減へと向かう現在の潮流も、社会的利益や社会への貢献度に関する疑問に根付くものであるように思われる。だが、歴史学に携わる研究者や教師も各々が、こうした問いに対する自分なりの答えを持っていることだろう。

僕なりの答えは、「歴史は現在使用される『道具』となるから。」これである。

歴史は、過去の出来事を記録した客観的な事実とみなされ、それゆえに、何らかの主張を行う際の正当性の根拠となりうる。「XX年の〇〇文書に△△と書いてあるから、この島は我が国の領土だ！」と訴えるように。だが、恐ろしいのは、自分に都合のいい解釈を通じて作られた歴史もまた客観的な事実であるがゆえに、正当性を持ち、他国に対する立派な武器に変貌することである。この矛盾が何とも悲しいのだけれども、正直面白い。

「歴史」は単なる過去の物語ではなく、歴史研究もまたマニア達の閉じられた世界では決してない。「歴史」が、権力の座にある為政者や政治家によって、時に活用され、時に悪用される「道具」として見事生まれ変わるということに気づいた時、これは最高に面白いなと思った。そこで初めて歴史を学ぶ意義を感じたといっても過言ではない。

自国民を奮奮・扇動するための「歴史」や、戦争を行う大義名分としての「歴史」、他国民の心情に訴えかけ援助を求めるための「歴史」…。「歴史」は現代において内政・外交を問わず様々な形で利用されている。現在のロシア・ウクライナ戦争を見ても分かるように。我々が歴史を学ばなければならない理由はここにあるのではないか。

歴史が「歴史好き」の趣味でしかないなら、皆が歴史を学ぶ必要はないだろう。だがそうではない。歴史は今の時代の「道具」として利用され、また、今も対立の火種としてくすぶり続けている。自分の国の歴史を知り、相手の国の歴史も知り、どんな問題が両国の間に存在しているのか。専門的な深い知識を持っておく必要はないが、何も知らないのはあまりにもマズイ。僕たち若者世代は、なお一層グローバルに世界と繋がる時代を生きていくのである。

将来どんな仕事に就くにせよ、日本を背負い、海外の人々と交流する機会が訪れる可能性がある。こうした個人レベルの繋がりを意識するのは当然のこと、国家レベルで見ても、先に述べたように国際情勢は不安定であり、世界の中の日本の立ち位置を真剣に考える必要がある。この先日本が戦争に巻き込まれる事態は、以前にもまして現実味を帯びているのである。

盲目的に扇動されず、無用な軋轢を避け、平和な時代をこれからも歩み続けていきたいのならば、若者こそ、我が国と世界の歴史を知っておく必要があると僕は思う。歴史と絡み合う問題が他人事ではないことは昨今のニュースを見ていけば分かるはずである。歴史は過去の時代の出来事だが、古いものではない。